

東京都実験区下北沢 (Tokyo Jikkenku Shimokitazawa)

第一号

シモキタで働く、遊ぶ

実験してる？

“下北沢で答え合わせ”しちゃってないか？
生まれ育った街の多層的な魅力
対談…柄本時生×岩男海史

『Japanese Tea Lab』がコンセプト。
下北沢で50年以上愛されるお茶店が仕掛ける実験とは？

ナンバーワンではなく、オシリワン。
ボクシングジムを営む異色の商店街会長が描く、
下北沢のあり方とは。

◎ご自由にお取りください。

柄本時生：SNSを見て抱いたイメージに対するギャップや答え合わせってどうなのか、もっとそれぞれの楽しみ方があるんじゃないかって思うんです。（中略）そんな僕とは感覚の違う人たちが、下北から何を感じて、下北がさらにどう変わっていくのが楽しみでもある。この場所がホームタウンである一人の地元民としては、不安と期待が入り混じっているというのが、本音ですね。

岩男海史：僕の仕事と紐づく話で言うと、古着屋もそうですよね。（中略）人々がZのバズなどに引っぱられることで、新規であれ老舗であれ、ほんとうにカルチャーが好きで志をもっている良店が埋もれていつてほしくない。まだそこをセグメントできない未来ある若い人たちの行く先に対する懸念もあります。どんな店に出会ってどんな服を買うのかって、生活を豊かにするうえでとても大切なことから。





—まずはお二人が出会った頃の話から、聞かせていただけますか？

時生…初めて話したのは舞台『泣くロミオと怒るジュリエット』（2020年）で共演した時ですね。海史くんが「僕ら同じ小学校なんです」って、話しかけてくれたんです。

海史…時生さんは僕の二つ年上で、応援団長をやってたんです。「カッコいいな」って、羨望のまなざしで見っていました。

時生…あれは、誰もやりた人がいなくて「じゃあお前がやれ」って半ば無理やり。年下の人から見たらそういうふう映っていたと知ってビックリしました（笑）。でも、いつのまにか仲良くなっていましたね。

—時生さんから見た海史さんの第一印象は？

時生…奇抜な格好をしていたので、「お前、下北の人間のくせに下北らしい服着てんじゃねえよ」って思ったと言いました（笑）。地元の人間って、意外とそういうステレオタイプな感じは出さないじゃないですか。

海史…僕は僕で「いやいや、下北で育ったんだからいいじゃないですか」って言いましてね（笑）。でも、そんなふうに時生さんがフランクに接してくれたおかげで、大所帯の舞台だったけど、大先輩のみなさんにもよくしてもらえたので、ほんとうに感謝しています。

—そして、時生さんは海史さんの服装に文句を言っていたのに、今や海史さんのプロデュースするブランド「MONSTROUS」でモデルを務められていると（笑）。

時生…ほんとですね（笑）。僕はアパレルの仕事ってほとんどしたことがなくて、唯「PHINGERIN」だけ長いことLOOKのモデルをやらせてもらっているくらいなんです。もってやってみたい気持ちはあったところに、オフアをもらったのでぜひと受けましたね。

—そして時生さんに参加してもらった結果、どうでしたか？

海史…もう素晴らしすぎて……。個人的には「モデル・柄本時生の存在が世間にバレてくれるな！と思ってしまっただけなんです。俳優としていろんな技を持っていることは多くの人が知るところだと思うんですけど、パブリックイメージは三枚目というか、個性的なキャラクターが強いような気がします。でも、ストレートな二枚目としてのカッコよさも圧倒的で、時生さんだけのクールさがある。ビジュアルを僕の事務所の皆さんに見てもらった時に「時生の魅力を引き出せるよね」と言っていたので嬉しかったですね。もちろん可愛さとか三枚目も出せるし、突然変異」という意味もあるブランド名ともびつたりだし最強ですよ。

—そもそも海史さんはなぜ「MONSTROUS」を立ち上げたのですか？

海史…例えば絵の得意な有名人がいたとして、その人の作品を既成のボディにプリントしただけで売れる、みたいなことが往々にしてあるじゃないですか。それはそれでいいのかもしれない。でも俳優ともうひとつ衣裳屋という職業をしている自分にとっては、有名人が作って簡単に売れる服に対してどこか悔しい気持ちがあったんです。

—反骨精神も大きかったんですね。

海史…とはいえ、「有名人でない自分」に対しても弱腰になっていた時期もありました。そういう文脈も含めて「突然変異」の意味もある「MONSTROUS」というブランド名にしました。そして自分の地元、下北沢発ということに対するこだわりもある。そう考えたときに、真っ先に浮かんだモデルが時生さんで、ダメ元でお願いしたら引き受けてくださいました。

—時生さんは、「MONSTROUS」についてどう感じていますか？



生まれ育った街の多層的な魅力

時生…海史くんにはデザイナーのご両親がいて、その二人の影響もあった舞台衣裳家もやっている。その色濃い背景が服にも出ていていると思うんです。生まれた頃からファッションというカルチャーに触れているから、彼自身と出来上がった洋服との親密度が高い気がします。そして、これらの洋服を見て、「なんか知ってるぞこれ」とは思わない。「あれ？こんな服知らないな」って、新しいカツコよさに出会えたようなオリジナリティを感じますね。

—今おっしゃったことは、時生さんにも言えることだと思うのですが、ご自身の出自が俳優としての実力的なアドバンテージになっていると思いますか？

時生…どうなんですかね。自分で自分のことはわからないんですけど、大鶴佐助（俳優、劇団ヒトヘダ座長）と出会ったときにそれを感じました。台詞を発した瞬間に「レベルが違うな」って。なぜそうなのか考えると、彼の父である唐十郎さんの存在が大きいんじゃないかと。唐十郎さんは新宿の花園神社に紅テントを建て、演劇とともに生きてきた俳優で、佐助はそんな父親と生活をともにしていたから、「劇場の声」を知っちゃってるんだらうなと、思いました。

—「知っている」ではなく、「知っちゃっている」なんです。

時生…将来的に俳優をやりたいとかやりたくないという話ではなく、そういう環境の中の生き物みたいな。で、僕も佐助に対して思ったことと似たようなことをたまに言われますね。実際に、学校が終わった父のいる下北の本多劇場やスズナリに「行く」というより「帰る」という感覚でしたから、そうなのかもしれないですね。

—お二人それぞれの家庭環境や下北沢との関りがある。そして、「MONSTROSA」からは、演劇や古着、音楽といったカルチャーが豊かな下北沢の縮図プラスアルファの魅力を感じます。ここからは、そんなお二人から見た下北沢という街について、話を聞かせてください。

海史…下北沢で「MONSTROSA」のビジュアル撮影をしたんですけど、時生さんは肌着でそこら辺を歩き回るんですよ。

時生…生活してきた場所だからね（笑）。

海史…その感覚もわかりますけど、多くの人の場合は渋谷や下北に行くとなると、「武装」じゃないけど、気合い入れてお洒落していく感覚があるんです。

—それが初対面の時生さんに「下北に住んでるのに下北らしい服」と言われたわけですね（笑）。

海史…はい（笑）。時生さんは街を歩いているだけで「あ、柄本時生だ！」「つめっちゃ声をかけられるんですよ。でも特に気に留めることもなく、嫌がるわけでもなくいたってニュートラル。だけど、生活感丸出しの状態から衣裳を着て被写体になるまでの流れもすごくシームレスで、そんな地元の人間味に、僕も地元民ながら「カツコいい」って思いました。

時生…そんな感じなんで、地元だから話せることもあれば、逆に気づいていない魅力もあるような気がしますね。

—今回はそこで生まれ育ったお二人にローカル目線の話を知りたいと思います。

海史…特に近年の下北は、例えば駅の南口がなくなったり、「ミカン下北」ができたり、大きく変わったじゃないですか。街は綺麗になったけど、地元の人間としては昔ながらの趣がなくなっているって寂しい気もする。そんな気持ちを商店街の運営の方に話したら、「気持ちはよくわかるけど、変わり続けることがポリシーだと思ってやっている」とおっしゃって



て、どこか腑に落ちました。たしかに僕の両親の時代から下北は若者の街だった。そして今も週末ともなれば大勢の若者が集まってきて、もう50年くらい若者の街であり続けている。でも、もし昔から何も変わらなかったとしたら、そのイメージはいつしかなくなつて、街にいる人の年齢層が上がつていただけかもしれないですね。

—確かにそうかもしれません。

海史…下北で若者時代を謳歌した先輩方が、自分たちと同じように今の若者にも下北を楽しんでもらいたいという願いがあるからこそその変化だと考えると、ポジティブな側面もたくさんあつて、「一緒に良い悪いと考えるのは違うなと、思いました。

時生…なるほどね。オレさ、下北沢ケージのオープニングイベントのトークショーに、同じく下北沢出身のKei-Keiさんと出たのよ。その時、若気の至りで「こんなのできてしまうがない」って言っちゃったの(笑)。

海史…オープニングイベントで？それは尖りすぎですよ(笑)。

時生…そんな類のことを喋って、締めの一言で「これからまた、新しい人がたくさん入ってくるのはいと思うけど、心の中で街のレスペクトは忘れないでください」って言っちゃったの。それに対してKei-Keiさんは「オレが子どもの頃、こは壁だった。それがケージになつて初めて中に入ることでできて、今新しい景色を見えています。そして今後、子どもたちがこの景色を見て何を感じてどうなるのが楽しみです」みたいなことを言ったの。「カッコいい…!!」なのにオレはなんてことを、ごめんなさい!」って思った。

海史…Kei-Keiさんって、下北沢の再開発に必ずしも前向きではないイメージがあつて、時生さんより尖ったこと言いそうなんですけど、そのコメントは見事です。すごく希望のある言葉だし、いろんな捉え方もできますね。

時生…イヤな印象はまったくなくて、絶妙だと思った。あんな大人になつたと思ってたもん。で、あらためて今の自分が思うのは、近年は特に、インターネットやSNSなどを通じて、何かしらのカルチャーを発信する街としての下北沢ブランドみたいなものが「出来上がった状態」で発信されている。だから来る人も予習復習して、答えを持つて訪れるじゃないですか。

—偶然性という要素は減りますよね。

時生…SNSを見て抱いたイメージに対するジャッジや答え合わせってどうなのか、もつとそれぞれの楽しみ方があるんじゃないかって思うんです。でもKei-Keiさんが言うように、そんな僕とは感覚の違う人たちが、下北から何を感じて、下北がさらにどう変わっていくのが楽しみでもある。この場所がホームタウンである一人の地元民としては、不安と期待が入り混じっているというのが、本音ですね。

海史…僕の仕事と紐づく話で言うと、古着屋もそうですよね。今の下北には140近い店舗があるらしく、衣裳屋としては仕入れ先がたくさんあつてめちゃくちゃ助かっているんです。でも、何店舗も回っていると、下北「古着」という事実が誇張された部分も感じます。それによつて「下北で古着屋をやれば儲かる」とか、「とりあえず下北沢」がほしいだけ「な店も増えたように思うんです。人々がSNSでのバズなどに引く張られることで、新規であれ老舗であれ、ほんとうにカルチャーが好きで志をもっている良店が埋もれていつてほしくない。まだそこをセグメントできない未来ある若い人たちの行く先に対する懸念もあります。どんな店に出会つてどんな服を買うのかって、生活を豊かにするうえでとても大切ですから。

—下北沢の面白さって、その奥行きだと思ふんです。メジャーな繁華街でありながらしつかり住宅街でし、そのなかで朝までやっている店やイベントがたくさんあったり、昔からずっと静かに営業している店や、流行とは距離のあるインディペンデントな文化があったり、ほんとうにさまざまな顔がある。

海史…そうだと思います。スーバーに行くとか客層の多様さに驚きますから。この街には地元で昔からいる人だけでなく、いろんな人種がいるんだなつて、ずっと住んでいても新鮮ですね。

時生…ちょっと話が逸れるかもですが、僕が勝手に「下北の妖精」って呼んでいた人がいて、去年あたりから見なくなつたんですね。そこら辺によく座つていた腰の曲がつたおじいちゃん。

—あ、わかるかもしれません。

時生…駅前で漫画を朗読していたおじいさんも見なくなりましたね。東方力丸さんという俳優さんで、実は僕、映画『蟹工船』(2009年)で共演しているんですよ。その漫画の方と一致したのはけつこう後なんですけど。お二人が下北から姿を消したのは個人的な事情かもしれない。でも、そういう人たちの居心地が悪くなる街にはなつてほしくないなつて、思うんです。そういう意味では、さまざまな文化や人のレイヤーの共存という、下北ならではの面白さに気がつかない、下北が下手な

人「が増えたような気はします。

海史…下北が下手な人「にも、下北のディープな魅力を伝えられたらなつて思っていますね。

—最後に「実験区」に因んで、お二人がこれからやってみたくいことも聞かせていただけますか？

海史…下北沢のどこかで、ファッションショーみたいなことをやってみたくいですね。この間「ミカンド下北」で「yuna」がファッションショーをやつていたんです。飲食店が集まっている通りをランウェイに見立てていて、映像がすごく良かった。それは「yuna」のアイデアであつて真似をすることではないんですけど、ベクトルとして僕もそういう独自の発想が効いた何かをやりたい。そのためにブランド力をつけなきゃなつて思います。

時生…実験というか、新しい試みとしてドラマの制作側として動こうとしています。でも予算のこととかさっぱりなんです。そこは海史くん、衣裳屋やブランド運営もやつてくれるわけだし、ガチで相談させて。

海史…ぜひ。僕もたくさん世話になってますから。今後ともよろしく願っています。



Introduction

1970年に創業、50年以上下北沢の地で愛されている「しもきた茶苑大山」。創業者から引き継ぎ、現在店舗を運営する大山泰成さん（飲食部門担当：写真右）と大山拓朗さん（販売部門担当：写真左）は、日本国内で15名ほどしかいない「茶審査技術十段（茶師十段）」という資格も持ち、さまざまな工夫をしながら兄弟で日本茶の魅力を伝えている。昨年、長く店を構えていた場所からreloadへと移転し、“Japanese Tea Lab”をコンセプトにリニューアル。その背景にはどんな想いがあったのか、どのような“実験”を仕掛けているのかを、お二人それぞれの目線からお話いただいた。（2022年8月WEB掲載）
取材・文：古田啓 撮影：岡村大輔

—お二人が「しもきた茶苑大山」を継いだ経緯を教えてください。

大山泰成さん（以下、泰成）：1970年に創業者の父が下北沢・丸和センタービルで開業し、今年創業52年を迎えました。私は大学で歴史を学んでいたこともあり教員を目指していた時期もありましたが、やはり幼少期から身近な存在であったお茶屋を継ごうと、新潟県のお茶屋で2年、三重県のお茶屋で1年半の修行を経て、ここの社員になりました。今は父から店を引き継ぎ、主に飲食部門を担当しています。夏場はかき氷、冬場は抹茶ラテをはじめとしたホットメニューを中心に展開し、これらのレシピ開発と製造、お客さまにお渡しするところまでが私の仕事です。

大山拓朗さん（以下、拓朗）：私も幼少期から新茶の時期には作業を手伝っていましたし、父が出向く審査技術競技会についていくなど、特にお茶の審査技術・鑑別能力を高める目的で開催される審査技術競技会では大人の競技の真似事（品種・茶期・産地当てなど）をして、偶然でも当たるとまわりの人に褒められて当時から楽しい場所だと思っていましたね。また、お茶を煎る作業を手伝うようになってからは、焦がすと父のゲンコツが飛んでくるので、焦げる直前の音や香りを感覚的に覚えたり。このような経験を通して、物心ついたときにはこの家業を継ぐものだと思っていました。

私たちは茶業の中でも小売り・卸売り部分を担っていますが、私の役割は産地の生産者や問屋から仕入れたお茶や、品評会で落札した荒茶の加工、それをお客さまに販売する部分です。

—それぞれの部門で「しもきた茶苑大山」だからこそ工夫されているのはどんな部分でしょう？

泰成：reloadに店舗移転をするとなった際に、飲食に関しては「日本茶スタンド」とし、気軽に日本茶を楽しめる場所にしようと考えました。構えていた店舗とは違って新店舗には喫茶スペースがないのですが、だからこそできることをしたいと思い、“隙間時間を埋める”スタイルにしてみようと。伝統的な淹れ方で飲んでいただくのも良いですが、手軽に飲める8オンスのカップ1杯にいかにも日本茶のおいしさを凝縮してお客さまにお渡しするかにフォーカスしています。

—まるでおしゃれなコーヒースタンドのようなスタイルですね。拓朗さんはいかがですか？

拓朗：お客さまにお茶の本質的な部分をみてもらうために、どんな人が、どんなときに、

どんな気持ちで飲むのか、そういうことを考えながらお茶を作ることを意識しています。固定概念なく、お茶を“実体験”してもらうにはどういうアプローチをしたら良いかを常々意識していますね。

—お茶というと伝統的で少々ハードルが高いイメージがありますが、お二人ともそれを覆すような“実験”をされていますね！今まで取り組んできた実験の具体をもう少し聞かせてもらえますか？

泰成：日本茶喫茶は、もともとビジネスとして成り立たないと言われていたんです。それは伝統的な淹れ方、伝統的な茶器、和菓子（生菓子）と、それぞれにお金がかかりすぎて採算が合わず店舗に負担がかかるのが理由。だったら、まるっきり違う方法で日本茶の魅力をお客さまに提案していこうと思ったんです。それがいまこの店を出しているかき氷であり、日本茶ラテで、この取り組み自体がすでに実験でした。

さらにかき氷自体も何度も実験を繰り返して今の形が生まれています。当初ふわふわの水に茶せて立てたきめ細やかな泡が特徴の抹茶をかけたいと思っていたものの、温かくてすぐに氷が溶けてしまったり、粘度をあげるために糖度を上げると甘すぎるなど、バランスに悩んでいたんです。今は泡立てたエスプーマを使っていますが、これは知り合いに聞いて食べにいったラーメンやカレーうどんがヒントになっていて、きめ細かい泡が旨みを包み込んでいたことから着想を得たものでした。エスプーマは3℃〜5℃くらいの温度帯が泡の状態が良いのですが、一方で氷の温度は0℃以下。0℃以上の温度で風味が出てくる抹茶の特性を考えると、口の中で氷とエスプーマが合わさり風味が際立ってくるこの組み合わせは最適だったんです。

—まさに理科の実験のようですね。拓朗さんの手がけている店頭販売商品の方はいかがですか？

拓朗：いま店舗でもトップクラスに人気のある「泰成」「拓朗」という名前がついたお茶ですが、これは元々とある雑誌の取材を受け、お取り寄せ企画のために作ったものだったんです。取材時に私がお茶に対しての想いをツラツラとお話していたら、言葉にするよりその想いを商品化してみたらどうか？と提案を受けたのが発端でした。私たち兄弟は二人とも茶師であり、かつ「全国茶審査技術競技大会、茶審査技術十段」という資格を持っているので、その目利きで作ったお茶とわかるように「茶師十段之茶」とし、それぞれの想いを込めたお茶に自分たちの名前をつけました。やったことがないことへの挑戦は印象深かったですし、その経験を

きっかけに、今は毎年それぞれが一押しするお茶に名前をつけて作り続けています。また、今年のパレンタインにはメリーチョコレートさんからオファーをいただき、チョコレートのためのお茶を合組（ブレンド）するという挑戦をしました。これはお茶の魅力をより多くの人に知ってもらえる貴重な経験でしたね。

生産者や加工業者から受け取ったお茶を、消費者が求める価値観にアジャストしていくという自分たちしかできない役割をまっとうしていきたいという考えの元にさまざまな実験を重ねています。

— reloadの店舗は“Japanese Tea Lab”というコンセプトを掲げていますが、今後ここで仕掛けたい実験はどのようなことでしょうか？

泰成：たとえばコーヒー業界で言うと、丸山珈琲さんや小川珈琲さんは昔ながらの焙煎技術や喫茶店という軸を大切にしながら、ロースタリーという店舗の形態を広め、スペシャルティコーヒーという新たな市場を作りました。日本茶も彼らの姿勢に学ぶ部分が多く、生き残るために何が必要かを考えるフェーズにあると思います。まずここに“日本茶ロースタリー”を構えたことが我々の第一歩ですが、後は下北沢に昔から根付くカフェ文化を大切にしながら、地域に必要とされるお茶屋を目指したいと思っています。今も地域の福祉作業所に焼き菓子に使う材料を提供したり、一般社団法人とフードロスの取り組みを進めています。今後はより一層日本茶を通して人と人、人と地域を繋いでいける活動をしたいですね。

拓朗：「Lab」は実験場を意味しますが、私考える実験は“実体験”のことです。ここはお客さまに「実体験＝価値に触れてもらう」をしてもらえる場でありたいと考えています。同じエリアにある旅館・由縁別邸代田さんの客室やレストランでうちのお茶を提供してもらっているのですが、そこで味わった方がここに買いにきてくれるんです。そういう方においしい淹れ方のレシピをお渡しするととても喜んでくださって。由縁別邸さんでの体験をLabでさらに深めるようなアプローチになっていれば嬉しいですね。なかなかゆっくりとお話しづらいけど時世はありますが、どんな形であれ、お客さまにお茶を実体験してもらえる機会をつくり続けていきたいと思っています。



ナンバーワンではなく、オンリーワン。ボクシングジムを営む異色の商店街

—金子ボクシングジムは、どのような背景で設立されたジムなのでしょう？

金子…金子ボクシングジムは、1965年4月に下北沢の地で産声を上げました。私の父・繁治がボクシング東洋チャンピオンで、日本人で初めてフェザー級クラスで国際タイトルを獲得した人だったんです。でも網膜剥離になり、これ以上ボクシングをするとう失明してしまう状態になってしまっ。『いよいよ次は世界戦だ』というタイミングで、引退せざるを得なかったんです。その3年後、自分が成しえなかった世界チャンピオンをどうしても育てたい』という想いで独立し、この地にジムをオープンしました。ジム開設当初は、まだまだよ者みたいな見方をされていたようです。でも長年やっていてと認知されてきます。2011年にはついに世界チャンピオンが誕生しました。父が生きているあいだに世界チャンピオンが誕生して、父をそのリングに上げることができた。それは、本当にありがたいことだなと思っています。

—お父様が、ジムを設立する場所到下北沢を選んだのはなぜですか？

金子…父が現役時代、所属していたのは目黒の笹崎ジムだったんですが、下宿していたのが下北沢だったんです。ジム設立のため土地を探していたとき、今の場所を見つけて。住宅街だけど小田急線が横を走っていて、「ちょうど宣伝になるだろう」ということでここを買ったみたいです。下北沢の名の通り、当時はここだと川が流れていて、台風が来るたびに川が氾濫していました。川に動物の死骸や鯉が流れてくるのを、橋の上から覗いていたことを覚えてます。最近はかなり整備されて、きれいになりましたね。

—金子ボクシングジムの目の前に、個店街「edog」が2021年にオープンしましたよね。ジムにはどんな影響がありましたか？

金子…工事をしている5年くらいは殺伐としていたし、コロナの影響も相まって練習生の数がガクンと落ちてしましました。大変な時代でしたけど、edogがオープンしてからは良い影響がありましたよ。まず人時が増えたので、体験入門に来る人も増えました。夜はうちのジムだけライトが付いているから、水族館の水槽をのぞくように選手たちのトレーニングを見られている人もいます(笑)。edogがオープンしたおかげで大勢の方に気付いてもらえるようになったので、すごくありがたいですね。

最近のは、下は5歳の幼稚園生、上は81歳のおばちゃんが入会してくれました。そのおばあちゃんは「90歳でキックボクシングを始めた」という人の新聞記事を読んで「私にもできるかしら」と一歩を踏み出してくれたようです。最初は「1週間に一回」と言っていたけど、今は毎日来てますよ！選手は3分動いて1分休むんですが、おばあさんは1分動いて3分休む。選手とは逆のペースでトレーニングして、30分くらいで帰っていきます。縄跳びも飛ぶしパンチングボルも打つし、すごいおばあちゃんですよ。

—お父様が偉大だからこそ、「自分はボクシングをやらない」という選択肢もあつたと思います。金子さんがボクシングに携わるようになったのはなぜですか？

金子…チームワークを重要視する競技ではなく、自分で勝つをもぎとる個人競技をやってみようと思ったからです。家がボクシングジムということで、小さいころはいろと犠牲になるわけです。たとえば、見たいいアニメがあつてもボクシングの生中継がやっていたらそちらばかり見られる。それから、僕らが普通のソーセージを食べているのに、合宿生はスタミナをつけるためにステーキを食べてるとかね。「羨ましいな」と思って見てましたよ。ボクシングをやっている

お兄さんたちの中で育つたので、逆に自分は「ボクシングはやらない」と野球をしていたんです。

でもそのうち、野球の体力づくりの一環で一緒にロードワークをするようになったんです。僕はしつかり野球に取り組んでいたので、チャンピオンクラスの人たちとも平気で一緒に走れる。すると「チャンピオンもこんなもんか」と思うわけです(笑)。さらに、野球がオフシーズンのときにサンドバッグを打ったりしていると、みんなが褒めてくれるんですよ。『さすが会長の息子だ、上手いなと。で「ちょっと兄ちゃんとやってみるか」とチャンピオンが相手をしてくれる。褒められたらそりゃ嬉しいし「自分もボクシングできるんじゃないか？」と思うようになって。

そんなとき、父と一緒に輪島功一さんの試合をリングサイドで見ました。韓国の柳斗斗選手にタイトルを獲得してしまい、そのカムバックとなる試合でした。15ラウンドのラスト、ノックアウトで輪島さんが勝つ試合を目の当たりにして「こりゃすごいな」と。それで、自分が戦って自分で勝ちをもぎとる個人競技のボクシングに取り組みむようになりまして。野球は自分がエラーをしてもまわりが上手ければ勝てるし、逆に自分が下手くそでもピッチャーひとりが上手くて三振とちやえば勝てますからね。ボクシングを本格的に始めたのは、高校2年生のときです。

—そのときには、プロを目指そうと思っていたんですか？

金子…ボクシングに真剣に取り組み始めた当初は、「将来はプロになり、その経験を活かして指導者になりたい」と思っていましたよ。大学でもボクシングをやろうと思い、スポーツの名門である東海大学に入りまして。ただ、どの学科に行くか迷っていて。「今後ボクシングを続けるのであれば体育学科かな」と迷っていた時期に、ちょうど作家の沢木耕太郎さんが取材のためにジムに来ていたんです。で、沢木さんが「将来ジムを継ぐなら、経営学科に行った方がよい」と言うてくれたんですよ。「ボクシングをやつていれば体育学は学べるから」、と。そのひとことで経営学科に入り、簿記や会計、マネジメントについて学びました。今になって、大学で経営や経済を学んで本当に良かったと思っていますよ。

ただ、目を悪くしてしまつてプロを目指すことができなくなりました。「プロになれないならそれ以上に優秀なトレーナーになろう」と思い、審判員の免許を取ったり、海外に行ったり、優秀なトレーナーのいるジムに行ったり……と、だいぶ勉強しましたね。

—金子さんが、あずま通り商店街の会長をするようになった経緯を教えてください。

金子…うちから世界チャンピオンが生まれたのと同じ時期、2011年に副会長を仰せつかりました。当時、会長が体調を悪くされていたんですよ。副会長は34人いて、私はいざとなつたら会長の代理をする筆頭副会長のような立場でした。任期半ばで会長が亡くなつてしまし、筆頭副会長だった私がそのまま会長になった、という経緯です。

それまでの僕は、自分で選手を育成していたことに加え保護司(犯罪や非行をした人の立ち直りを地域で支える民間のボランティア)をしていたこともあつて、「青少年育成」に目を向けていました。ただ、商店街会長になった分岐点で目標が変わりましたよ。それまでは再開発にはあまり関心がなかったのに、駅や駅前、そして各商店街がきれいで安心安全な街になることが、価値なんだと思うようになるんです。不思議と街づくりに目を向けた途端、街の人たちも金子ジムに目を向けてくれるようになった気がしますね。「良い選手が育つてね」とか「良い試合だったね」なんて声をかけてくれる人が増えてきて。で、「金

子が生懸命街づくりをしているなら、協賛しよう」とジムを応援してくれる人も増えてきました。

—会長になってから、街づくりに目線が向くようになったんですね。ちなみに保護司のボランティアでは、どういうことをしていたのでしょうか？

金子…刑務所に入った方々が、出所後に差別を受けずちゃんと生活ができるようサポートをしていました。もともと金子ジムには、保護司をしているお寺の住職や神社の神主、学校の先生などが「自分が担当している少年の面倒を見てください」と来ていたんですよ。彼らを受け入れてたこともあつて、保護司のことは薄々知っていました。まさか自分がやるとは思ってませんでしたけどね。いざ保護司をやつてみたら、やっぱりしていた子たちがボクシングを始めるって喧嘩をしなくなるんですよ。本当に強くなると、喧嘩が馬鹿らしくなってくるんですね。20年も保護司をやつていたので、法務大臣から表彰されました。そうすると「地位が身を育てるんじゃないですか、ますます襟を整えてしつかり世の中のために指導しなきゃいけない」と思うようになりましたね。

—金子さんが商店街会長になった当初、どんな商店街にしたいと思っていましたか？

金子…店舗さんのほうから「商店街に入れてください」と言ってくれる場所にしたいと思つてました。新しいお店ができると「商店街に入会してくださいね」と、こちらからあいさつに行くわけですよ。でも「うちはそんな余裕ないから」とか「商店街に入つてもうちには関係ないから」と断られてしまふのが普通。そんな現状にぶち当たったとき、メラメラと「この人たちが入りたいと思う商店街にするためにはどうしたら良いのか」と思えたんです。入会申込書はこちらが持つていくのではなく、店側が取りに来てくれる商店街にしたい。そのためにはどうしたら良いのか、会員・非会員関係なく商店街の若い経営者を集めて意見を聞かれました。そこで若い子にアドバイスされたことを実行したら、気付いたら「商店街に入れてください」と来てくれるようになっていました。そんな商店街、なかなかないみたいですよ。

「気付いたら達成できている」という考え方は、実はボクシングの育成も同じなんです。「勝て！ジャブ出せ！」って言っても、勝てません。気付いたらジャブが出て勝っている状態をつくるのが大事なんです。どうしたら「入りたい」と思う商店街になるのか、どうしたら「勝てる」選手になるのか……こういうことを考えるの、得意なんです(笑)。会長になった当初は3040店舗しか加盟してませんでした。この10年で80店舗くらいまで増えました。商店街には130くらい飲食店があるので、まずは100店舗が会員になることを目指したいです。とはいへ誰でも良いというわけでもなく、イベントや街の盛り上げに協力してくれる方々に会員になってもらえると嬉しいですね。

—ボクシングジム会長・あずま通り商店街会長など、金子さんにはいろんな顔があります。それぞれの取り組みをするにあたり、共通する考え方はありますか？

金子…ナンバーワンじゃなくて良い、オンリーワンでいたい」という共通した想いがあります。金子ジムは、「世界で通用する超一流の選手を育てることも大事だけど、かならずしもナンバーワンにならなくても良い。2流・3流でも良い」という考えなんです。だけど、なかでオンリーワンでいたいと考えたとき、たとえば「金子ジムならではの」会長がいたらオンリーワンになりますよね。日本全国見て「保護司で質をもらい、商店街の会長をして、世界チャンピオンを育てたボクシングジム会長」は僕しかないんじゃないか？と思うんです。ジムは、こういうところに価値観を置いて頑張っています。

金子健太郎

下北沢で約60年続く老舗、金子ボクシングジム。元東洋フェザー級チャンピオン・金子繁治氏が設立したジムで、現在は長男の健太郎氏が会長を務めている。過去には世界チャンピオンを輩出した名門ジムであるが、健太郎氏が持つのは「ボクシングジム会長」の顔にとどまらない。下北沢・あずま通り商店街の会長でもあり、下北沢の街づくりにも深く関わっている。下北沢で生まれ育ち、現在も下北沢に根付いている健太郎氏。彼は、どのような想いでこの街を見つめているのだろうか。長く下北沢を見つめてきた健太郎氏だからこそその視点で「ジムと街のこれから」について語ってもらった。(2023年10月WEB掲載)

取材・文：堀越愛 撮影：岡村大輔

下北沢の街づくりも同じで、「ナンバーワンではなくオンリーワンの街」にしたいと思っています。駅前ひとつとて、ほかの駅とは全然違う景観にして……たとえば、駅前全面を芝生にして、家族がビニールシート広げてお弁当食べているような光景が広がっていたらオンリーワンですね？実現できるかは別として、そんな妄想をしていますよ。選手の育成と同じで、街づくりも「これ以上は無理だ」と思ってしまったらそこまでしか実現できません。骨折して目が腫れあがっていても、潜在能力を発揮して試合に勝つちやう選手をたくさん見てきました。街づくりも同じで、「こんなこと無理だよ」ということに挑み続けることが大切なのかなと思います。

—金子さんは、下北沢をどんな街にしたいと思っていますか？

金子…帰るときに後ろ髪を引かれて「もうちょっといいな」と思える街。そして、「次は愛する人を連れてきたい」と思える、アミューズメントパークみたいな街にしたいですね。たとえば、デイズニランドから帰るときで「また来たいな」とか「今回は家族で来たけど、次は恋人と来たいな」とか思うじゃないですか。そうやって帰るから、リピーターになると思うんです。同じように、下北沢も帰って行く人たちが後ろ髪引かれつつ「次は子どもを連れて来よう」とか「次は孫を連れて来よう」とか「言いは易しだよ」とか「難しいよ」とか言ってくる人がいるんですよ。でも、そういう人がいるほど僕は「しめしめ、ありがとうございます」と思う。反骨精神というか、燃えてくるわけですよ（笑）。

行政や企業の兼ね合いもあるからすべては実現できないけど、商店街単位だったら「オブジェを置いてアミューズメント感を出す」とか工夫ができますよね。たとえばあずま通りだったら、カレーフェスティバルをやっているからカレーライスオブジェを置く。一番街さんだったら天狗まつりをやっているから、天狗のオブジェがあるとか。商店街の窓口に一緒に写真を撮れるような造形物を置いておいたら、SNSで流行るかもしれないですね。

—たしかに、商店街の象徴となるようなものが置いてあるのは面白そうですね。

金子…今だったらアニメ『ぼっち・ざ・ろっく！』が人気だから、4つの商店街にひとりずつ登場人物の女の子たちのオブジェを置くとかね。そうしたら、中高生がやって来るかもしれない。

そういうえば、この前Instagramでバズったんですよ。盆踊りで『ぼっち・ざ・ろっく！』のテーマソングに合わせて踊っている様子を、『しもプロ（下北沢情報サイト）』さん（※）がインスタに載せてくれて。そうしたら1週間で159万人くらいが反応してくれたんです。僕のところにも「会長、インスタで踊ってたでしょ」ってメールが10通くらい来しました。「バズる」っていうのを勉強できましたよ（笑）。

それから、住んでいる人たちの「意識が高い街」にしたいですね。街をより良い場所にするのは、意識だと思っんです。「ゴミが無い、落書きが無い、来る人達もマナーを守っている。だから、僕もゴミ拾いしながら歩いていますよ」。

—金子さんが考える「今後の妄想」についてお聞かせください。まずは、ジムとしてはいかがですか？

金子…ジムで10人目の日本チャンピオン、そして2人目の世界チャンピオンを生むことですね。優秀な子たちが揃っているんで、来年は「金子ジムの勝負の年」として、タイトルマッチを2〜3試合組みたいと思っています。2025年に60周年を迎えるので、そのタイミングで2人目の世界チャンピオンが生まれていたら良い

ですね。60周年+世界チャンピオン誕生パーティーを、大々的にやりたい。ホテルオークラの平安の間なんかでパーティーをして、僕は皆さんの前で祝辞を述べる……妄想で終わらせたくないですね！

—下北沢の街づくりの側面では、どんな妄想をしていますか？

金子…より一層、盤石な商店街連合会にしていきたいですね。世界的にも下北沢は注目されていますし、商店街同士が仲の良い街つてあんまり無いんですよ。だいたいのところは派閥があったり、張り合ったりしているそうで。下北沢は各商店街がしっかりとスクラムを組んでいますし、さらに町会ともいい関係性です。それぞれが協力的なのは下北沢の強みであり、オンリーワンですね。

—下北沢には6つの商店街がありますよね。昔から良い関係性だったんでしょうか。

金子…我々の親の代は、商店街同士で張り合ったりもしていたそうですよ。今でも、ちょっとした揉め事が起きることはあります。ただ、そういうことをバンと蹴散らせるくらい、理事長や会長同士の仲が良い。仮に商店街の若旦那同士で揉めることがあっても、その上の代は「俺は仲良くやるよ、毎日一緒に飲んでんだから」と言うような関係性。そもそも商店街のトップ同士が同じ年代で育った環境や価値観が大体一緒なのもあって、協力し合えるんですよ。

僕の想像ですけど、今の下北沢には「うちの商店街さえ良ければいい」と思う人はいなくなってるんじゃないかな。ひと昔前までは「うちさえ良ければ」と考えてみたけど、どこかだけ突出してもダメな。自分の商店街で実施するイベントにお客さんが来ることで、いかにほかも潤うかとみんな考えていると思いますよ。そう信じています。

—最後に、金子さん個人が描いている未来を教えてください。

金子…先ほどジムの妄想をお話しましたが、うちの「隠し玉」である甥っ子の金子佳樹に、日本チャンピオンになつてもいいなと思っています。下北沢で生まれ、下北沢の野球チームに入り、下北沢の学校に通つた、金子繁治の口元を受け継いだ男です。佳樹は高校・大学と野球に打ち込んでおり、プロを目指すほど本気で取り組んでいます。しかし夢は叶わず卒業後はサラリーマンをやっているんですが、僕としてはそろそろ「誰かに次を委ねたい」という想いがあつて、3年で良いからボクシングをやらないか」と誘ったんです。名門校で野球をやっていたけどあつて、スタミナも根性もあるし、プレッシャーにも強い。プロを目指すというので、「おじさんと甥っ子」ではなく「会長と選手」という関係でトレーニングをして、今年の4月にプロテストに受かりました。11月22日にはついにデビューします。

これは初めて言いますが、いずれは佳樹に金子ジムの2代目会長になつてほしいと思つてんです。これが僕の、個人的な今後の楽しみです。注目してほしいです。

—下北沢にルーツのある甥っ子さんが、金子ジムの隠し玉なんですね。今後の活躍が楽しみです！

金子…ぜひ、デビュー戦から追いかけてもらいたいですね。金子ジムとしての地で60年近くやってきているからこそ、結果も出さなきゃだめだなと思つています。「金子ジムの会長は一生懸命街づくりやつて、保護司をやつてね。でもあそこはひとりもチャンピオンがいない」ではシャレにならないと思うんですよ。先ほ

ども言いましたけど、「ジャブ出せ」と言つたつて出ないんです。「ジャブ出せ」と言わずともジャブが出るような選手を育てるのが重要。うちのトレーナーたちにも伝えてますよ。言うのは簡単だけど、やらせるのは大変。言わずとも結果的に勝ちを持つてくるような選手を育てることができれば、名トレーナーになれるし、金子ジムも俺も株が上がります（笑）。

—世界チャンピオンを輩出した金子会長が言うからこそ、説得力がありますね。

金子…良い選手を育てることはできたと思うので、今度は世界的に見ても優秀なトレーナーを育てたいですね。今こうやって語っていることが、数年後にすべて叶つていて「全部実現できましたね」と祝杯を上げたいです。「ただ言つただけではなくちゃんと実現したね」とみんなに喜んでほしいし、そう言わせたい。それができたら、より説得力があるじゃないですか。

やつぱり、僕は人を喜ばせるのが好きなんです。そのためならば、チンドン屋にもなりますよ。だから商店街も会長つていう立場ですけど、汗水たらしてやぐらも組むし、テントも張る。「良い年して汗かいてつて言う人もいるけど、いまだにそうやって動いている自分が好きなんです。見てくれる人は絶対いますしね」。

—金子会長の妄想、ぜひ実現していただきたいです。

金子…ほかにもまだまだやりたいことはありますよ！ひそかに思い描いているのは、「下北沢スポーツフェスティバル」。下北沢には、金子ボクシングジムがあつて、フィットネスクラブもあつて、下北沢成徳というバレーの強い高校がある。さらに、大学でバスケットボールを指導している経営者もいるんですよ。音楽祭や映画祭があるならスポーツのお祭りもあつて良いですね。僕の本業でもありますし、スポーツや健康に目を向けたフェスはやりたいですね。実現できたら、駅前にリングを立てて、そこにうちの佳樹が日本チャンピオンを持つてきて、凱旋試合をやつて……どんな妄想が湧いてきますよ。下北沢は、「妄想を妄想で終わらせない街。全部、実現したいですね」。



金子健太郎

TOKYOTO JIKKENKU SHIMOKITAZAWA

TOKYOTO JIKKENKU SHIMOKITAZAWA

TOKYOTO JIKKENKU SHIMOKITAZAWA



実験の力で下北沢から世界を面白くするメディア
「東京都実験区下北沢」
取材申し込みはお問い合わせまで

編集後記

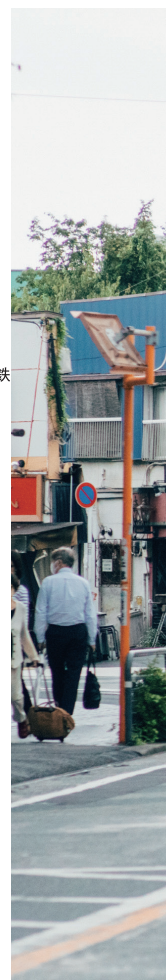
下北沢はその独特な街の人格と寛容さで、多くのクリエイターや挑戦者を引き寄せています。東京都実験区下北沢は、実験精神を持つ人々が新しいアイデアを形にし、街に新たな魅力を加えている姿を紹介するWEBメディアです。彼らの挑戦がどのように街の風景を変え、そしてその寛容な環境が新たな試みを支えているのか。読者の皆様が下北沢の多様な魅力を再発見し、街の未来に思いを馳せるきっかけとなれば幸いです。

発行：東京都実験区下北沢、製作委員会
企画・制作：京王電鉄株式会社、株式会社京王SCクリエイション、Konei
編集：雨宮崇人、中村悠人
デザイン：熊倉正敦、中村悠人
紙資源再生：株式会社ペーパーバレード



X (@jikkenku_tokyo)
#下北沢 #東京都実験区下北沢

この冊子では、京王線沿線の紙資源を循環する取り組みとして、京王電鉄から排出される交通広告などの事業ゴミを再生した紙を使用しています。



TOKYOTO JIKKENKU
SHIMOKITAZAWA

TOKYOTO JIKKENKU
SHIMOKITAZAWA

TOKYOTO JIKKENKU
SHIMOKITAZAWA

東京都実験区下北沢

(Tokyoto Jikkenku Shimokitazawa)

第1号



実験の力で下北沢から世界を面白くするメディア
「東京都実験区下北沢」
取材申し込みはお問い合わせまで

編集後記

下北沢はその独特な街の人格と寛容さで、多くのクリエイターや挑戦者を引き寄せています。東京都実験区下北沢は、実験精神を持つ人々が新しいアイデアを形にし、街に新たな魅力を加えている姿を紹介するWEBメディアです。彼らの挑戦がどのように街の風景を変え、そしてその寛容な環境が新たな試みを支えているのか。読者の皆様が下北沢の多様な魅力を再発見し、街の未来に思いを馳せるきっかけになれば幸いです。

実験してる？

「下北沢で答え合わせしなきゃいけないか？
生まれ育った街の多層的な魅力
対談…柄本時生 × 岩男海史

「Japanese Tea Lab」がコンセプト。
下北沢で50年以上愛されるお茶店が仕掛ける実験とは？

ナンバーワンではなく、オンリーワン。
ボクシングジムを営む異色の商店街会長が描く、
下北沢のあり方とは。

シモキタで働く、遊ぶ

柄本時生：SNSを見て抱いたイメージに対するギャップや答え合わせってどうなのか、もっとそれぞれの楽しみ方があるんじゃないかって思うんです。（中略）そんな僕とは感覚の違う人たちが、下北から何を感じて、下北がさらにどう変わっていくのが楽しみでもある。この場所がホームタウンである一人の地元民としては、不安と期待が入り混じっているというのが、本音ですね。

岩男海史：僕の仕事と紐づく話で言うと、古着屋もそうですよね。（中略）人々がSNSでのパズなどに引っぱられることで、新規であれ老舗であれ、ほんとうにカルチャーが好きで志をもっている良店が埋もれていつてほしくない。まだそこをセグメントできない未来ある若い人たちの行く先に対する懸念もあります。どんな店に出会ってどんな服を買うのかって、生活を豊かにするうえでとても大切ですから。

◎ご自由にお取りください。



X (@jikkenku_tokyo)
#下北沢 #東京都実験区下北沢

この冊子では、京王線沿線の紙資源を循環する取り組みとして、京王電鉄から排出される交通広告などの事業ゴミを再生した紙を使用しています。

